

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★


Data

製作総指揮：チャン・イーチェン
監督・脚本・製作：王家衛（ウォン・カーウアイ）
出演：梁朝偉（トニー・レオン）／張國榮（レスリー・チャン）
／張震（チャン・チェン）

ブエノスアイレス (春光乍洩／Happy Together)

1997年・香港映画・90分

配給／プレノンアッシュ

2004（平成16）年7月3日鑑賞

<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004>

みどころ

アルゼンチンのブエノスアイレスは、地球上ちょうど香港の裏側にある所。その最も異国の地を舞台に、王家衛（ウォン・カーウアイ）監督が、香港の2大俳優、張國榮（レスリー・チャン）と梁朝偉（トニー・レオン）の「同性愛」を描いたのが、この映画。2人間の恋の駆け引き（？）も面白いが、若者が持つ不満や虚無感、そして現実の狭い世界からの脱出と別の広い世界への憧れが底流を流れるテーマ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<何ともショッキングな映画>

この映画のテーマは、孤独で満たされない若者たち、そして、狭い閉じこめられた世界から自由で広い世界へ飛びたいと願う若者たちの「愛」。それも、びっくりするなかれ！男同士の愛だ。これを演ずる主人公は、ウィン（張國榮）とファイ（梁朝偉）の2人。再三スクリーンに登場するウィンとファイとの抱擁シーンやキスシーン、そしてベッドシーンを美しいとみるかどうか・・・？

私が観た「中国映画の全貌2004」開催中のシネ・ヌーヴォの館内は満席だったが、その90%以上が女性客（というよりオバちゃん）。彼女たちは、2人のこんなシーンを一体どんな感覚で観ているのだろうか・・・？何はともあれ、この映画についての事前の情報がある程度もっていた私にとっても、これは何ともショッキングな映画・・・。

<なぜブエノスアイレスなのか？>

ブエノスアイレスはアルゼンチンの首都。王家衛（ウォン・カーウアイ）監督は、なぜ、このブエノスアイレスの地を2人の同性愛を展開する舞台として選んだのか？

それはブエノスアイレスが、地球上、ちょうど香港の反対側にあり、香港から最も遠いところだから。つまり、狭い香港や国の束縛から離れ、自由な土地で、自由に飛び回りたい若者像を描くには、この異国の地がもっともふさわしいと考えたためなのだ。

<原作はプイグの小説だが・・・>

パンフレットによれば、この映画は、もともとは『ブエノスアイレス・アフェア』というタイトルになるはずだったとのこと。そしてこれは、アルゼンチンの作家のマヌエル・プイグの小説のタイトル。王家衛監督の第2作の『欲望の翼』(90年)が、このプイグの『赤い唇』にインスパイアされているのと同じように、この映画は、プイグのこの小説にヒントを得て、これを映画化したもの・・・と思うと、それは全然違う。そうではなく、あくまで、この小説の内容とは無関係に、そのタイトルだけを「流用」したものらしい。

<面白い恋のかけひき？>

男と女の恋愛と同じように、ウィンとファイの男同士の恋愛(?)にも、やはりそれぞれの性格があらわれるし、2人の中の恋のかけひき(?)もある。まず、ファイは真面目で、多分血液型はA型(?)。もちろん、仕事なんかはやりたくないが、生きていくためにはやむをえないと割り切り、結構真面目にこなすタイプ。①ホテルのドアマン、②レストランの厨房での仕事、③冷凍室での仕事を、それなりに真面目にこなしている。

これに対してウィンは、仕事なんかやる気は全くなし。必ず誰かにたかり(?)、そこに寄生して(?)生きていくのが当然と考えている様子。しかしそのため、自分の男性としての魅力(?)は、いつも計算している。血液型からすれば、さしずめO型か・・・?

この2人は何度もケンカ別れをするが、しばらくするとウィンがいつも「やり直そう」と言い出して、結局は元のサヤへ。今回2人は、「やり直す」ため香港を離れてアルゼンチンへ。そこでの2人の情熱的な愛を交わすシーンは衝撃的・・・?

しかし、イグアスの滝を見物するための車の中で、2人はケンカ。なぜなら、道に迷い、ボロ車は故障。これにウィンはイライラし、それがファイにも伝染。そこで、ウィンは勝手に1人で歩き出した。これによって、2人は再び「別れる」ことに・・・。この2人は、こんな「別れ」と「やり直し」のくり返し。その姿を見ていると、時々笑いもこみあげてくるが・・・。

<圧巻!イグアスの滝>

2人が行ってみたいと言いながら、道に迷って辿り着けなかったのは、イグアスの滝。この巨大な滝のシーンは、ホントに圧巻。これを撮影するための滝の上空でのヘリコプターによる撮影は、生命がけだったことがパンフレットで紹介されているが、そりゃそうだろう。

2人のケンカ別れの原因となったのは、ここへ行く途中で、道に迷って辿り着けなかったこと。しかし、映画の後半、1人になったファイがこの滝を訪れ、水しぶきをあびながら滝を見上げている時、彼が思うのはウインのことだけ。ファイの、「ウインを思い出し、悲しくなった。いるはずの彼がいないから」というナレーションが流れてくるのが、何とも切ない・・・。

<魅力的な音楽>

アルゼンチンといえば、アルゼンチンタンゴ。ファイがドアマンをしているクラブの中では、ちょっと魅力的なタンゴのダンスシーンが見られる。そして、ウインとファイの男同士による、妖しげなダンスも・・・。

この映画では、物語の進行を支えるのは、主にファイのナレーションとなっている。そのためセリフはそれほど多くなく、スクリーンは静かに流れていく。そして、セリフの少なさを補うのが、さまざまな音楽。パンフレットではそれを詳しく解説しているが、残念ながら私はそこに書かれてあることはほとんどわからない。しかし、物語にピッタリの魅力的な音楽がたくさん使われていることはたしか！

<後半からはチャンの登場>

映画の後半からは、チャンが登場する。彼は、ファイが働く厨房での後輩だが、チャンの目的は、「できるだけ遠く」へ行くこと。親にも居場所を知らせず、今はそのための資金を稼いでいるわけだ。彼は目が悪かったせいで、耳が人一倍鋭い。そこで、ファイがいつもウインに電話しているのを聞き、その電話の相手に興味シンシンの様子。

そんな中、2人は仲良くなり、チャンは1人旅立つ前にファイの声をカセットテープに入れてもらうことに。チャンの到達先は、南米大陸の最南端。その灯台のてっぺんに立つチャンは・・・？

<舞台は急に台北に>

突然、舞台は台北へ。ファイが一人でここを訪れたのは、ファイのナレーションによれば、「急に故郷が恋しくなった。離れていても、とても身近に感じた・・・」ため。そして、ある屋台に立ち寄り、おすすめの料理を注文するファイ。そして、この屋台の奥には何とチャンの写真が。ここは、チャンの両親がやっている屋台だ。

ここで、テレビニュースでは、1997年2月、93歳で亡くなった鄧小平死亡のニュースが流れてくるのがミソ。そして、すかさずファイの「ここは午後の台北。1997年の2月、地球のこちら側に帰ってきた」というナレーション。そして、続いて「台北に1晩泊まった。どの夜店もとても込んでいた。チャンの家族の夜店も・・・。彼が気ままに旅をできるのは、帰る場所があるからだ。俺の場合、帰ったら父は何て言うか・・・」と

いうナレーション。そして、さらに「・・・俺は確信した。会いたいとさえ思えば、いつでもどこでも会えることを」とも・・・。

さて、こんな放浪の旅を続けたファイは、このあと香港の親元へ帰っていくのだろうか・・・？そして、ウィンは・・・？

2004（平成16）年7月6日記